

廣津和郎全集 才士之卷

廣津和郎全集

第十一卷

広津和郎全集 第十三卷

定価四二〇〇円

昭和四十九年十一月十日印刷
昭和四十九年十一月二十日発行

著者 広津 和郎

発行者 高 梨 茂

印刷者 山 元 正 宜

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二一
電話（五六一）五九二一
振替東京三四

広津和郎全集
第十三卷

目次

同人感想

一五

ペンと鉛筆（大正五年一月）

一九

パイと紅茶

二二

私だけの事

二四

日記

二六

志賀直哉氏の印象

二九

初めて小説を書いて得たいろ／＼
の感想

三一

鎌倉日記

三三

『変目伝』の序

自分の行くべき道

「神経病時代」の不満足から生れた

「二人の不幸者」

三保の松原にて

葛西善蔵君の一面

奈良より

谷崎精二君の印象

宇野浩二氏の印象

芸術についての断片

一寸描いて見た絵の事

雑感

変 目 伝 序 三 保 の 松 原 に て 葛 西 善 蔵 君 の 一 面 奈 良 よ り 谷 崎 精 二 君 の 印 象 宇 野 浩 二 氏 の 印 象 芸 術 に つ い て の 断 片 一 寸 描 い て 見 た 絵 の 事 雑 感

増田篤夫の椅子と靴

甘粕は複数か？

尾崎紅葉の机

ペンと鉛筆（大正十三年六月～七月）

正宗白鳥と珈琲

ペンと鉛筆（大正十四年九月）

その夜の三人

帝展西洋画素人評

戯曲を書く私の心持

初秋雑筆

出る芽

銀座と浅草

八

六

五

九

一〇

一八

二二

二七

二四

二六

二三

一五

芥川君の事

一四〇

自分の遺書——芥川君の遺書

一四一

葛西と自分と

一四二

先ずベエシエンスから

一四三

父柳浪について

一四四

盛夏雑筆

一四五

カッフェエ漫談

一四六

随感随想（昭和七年三月二十七日～三十一日）

一四七

随感随想（昭和七年六月八日～十一日）

一四八

奇蹟派の道場主義

一四九

文芸随筆

一五〇

東の春・西の春

一五一

無精作家の創作談

二〇四

「文芸懇話会」の意味

二〇七

明るさと暗さ

二〇九

『随筆わが漂泊』

二一五

佐藤君に答う

二一八

名作屏風展の秋月

二二三

早稲田派煮豆の弁

二二六

河 鹿

二二九

草雲雀

二三三

心臓の功罪

二三四

八百長的な笑い

二三七

民衆は真相を知りたい

二三八

梶井基次郎の手紙	二四
此頃の世の中	二四
絵と文学	二五
教育方針と文学	二五
ひとりごと	二六
梅原龍三郎について	二七
或日の感想	二七
春寒雑筆	二七
時代と芸術	二九
為政者の文学利用	二五
年頭雑感	二九
考えることと見ること	二七

自作について

三〇一

派閥なし

三〇四

夢殿の救世観音

三〇八

豪徳寺雑記

三一三

須菩提

三二八

幽霊列車

三三二

戦時日記

三三八

大和路

三三七

文学者の真実

三三八

牧野信一

三九四

田山花袋

四〇一

奈良と小出檐重

四〇六

壁画焼失をめぐるって

四二

戦争放棄の声

四三

志賀氏と熱海

四五

手帳

四八

「チャタレー夫人」の問題

四三

断片

四五

私も脚本を書いた

四六

「神経病時代」を書くまで

四二

久米正雄に漂う悲しさ

四八

高田保の死

五一

本郷の宿

五一

私と古陶磁

四九

熱海雜筆

生みの親から離れて行った子供

私も一言だけ忠告する

「中国名陶百選展」を見て

犀星氏の手紙

宇野浩二の思い出

虚無から楽天へ

「無」が私のよりどころ

正宗白鳥さん追憶

金を拾った話

戦争は私を変えた

しかし希望はもてる

四三

四六

四七

四七

四七

四八

四八

四八

四八

四九

四九

四九

年譜

四九九

主要著作年表

五一五

主要著書目録

五四五

あとがき

随 笔

二

